武蔵野日曜集会

キリストの実存
――ヨハネ伝第５章１～18節――

１９９４年７月３日
小池辰雄

神の権威　自己離脱　キリストの実存　キリストの中に身入（しんにゅう）　愛せざるを得ない　体験し体現
しなかったらつまらん　私を離れるな　キリストの直弟子の次元　創造の世界　自己を突き抜
けて　キリスト直結者　各人が歩いて体験し体現する真理　聖書は楽しくてしょうがない

【ヨハネ5・1～18】

1この後ユダヤ人の祭ありて、イエス、エルサレムに上り給う。
2エルサレムにある羊門のほとりにヘブル語にてベテスダという池あり、之
にそいて五つの廊（ろう）あり。3その内に病める者・盲人・跛者・痩せ衰えたる者ど
も夥多（おびただ）しく臥しいたり。（水の動くを待てるなり、4それは御使のおりおり降
りて水を動かすことあれば、その動きたるのち最先（いやさき）に池にいる者は、如何な
る病にても癒える故なり）5ここに三十八年、病になやむ人ありしが、6イエ
スその臥し居るを見、かつその病の久しきを知り、之に『なんじ癒えんこと
を願うか』と言い給えば、7病める者こたう『主よ、水の動くとき、我を池に
入るる者なし、我が往くほどに他の人、さきだちて下るなり』8イエス言い給
う『起きよ、床（とこ）を取りあげて歩め』9この人ただちに癒え、床を取りあげて歩
め り。

その日は安息日に当りたれば、10ユダヤ人、医（いや）されたる人にいう『安息日
なり、床を取りあぐるは宜（よろ）しからず』11答う『われを医ししその人「床を取
りあげて歩め」と云えり』12かれら問う『「取りあげて歩め」と言いし人は誰
なるか』13されど医されし者は、その誰なるかを知らざりき、そこに群衆い
たればイエス退き給いしに因る。14この後イエス宮にて彼に遇いて言いたも
う『視よ、なんじ癒えたり。再び罪を犯すな、恐らくは更に大なる悪しきこ
と汝に起こらん』15この人ゆきてユダヤ人に、おのれを医したる者のイエス
なるを告ぐ。16ここにユダヤ人かかる事を安息日になすとて、イエスを責め
たれば、17イエス答え給う『わが父は今にいたるまで働き給う、我もまた働
くなり』18此（これ）に由りてユダヤ人いよいよイエスを殺さんと思う。それは安息
日を破るのみならず、神を我が父といいて己を神と等しき者になし給いし故

なり。

●神の権威

1この後ユダヤ人の祭ありて、イエス、エルサレムに上り給う。

これは「プリムの祭」といって、大体、2、3月の項です。

2エルサレムにある羊門のほとりにヘブル語にてベテスダという池あり、之にそいて五つの廊(ろう)あり。3その内に病める者・盲人・跛者・痩せ衰えたる者ども夥多(おびただ)しく臥しいたり。（水の動くを待てるなり、

いろいろな可哀相な人たちがたくさんいるわけですね。

4それは御使のおりおり降りて水を動かすことあれば、その動きたるのち最先(いやさき)に池にいる者は、如何なる病にても癒える故なり）

「時々水が動く」とは科学的にいうと、間歇(かんけつ)泉です。信仰というのはおかしなもので、本当にそう思うと、そうやって治ったりするわけです。

5ここに三十八年、病になやむ人ありしが、

三十八年とは大変なものですな。

6イエスその臥し居るを見、かつその病の久しきを知り、之に『なんじ癒えんことを願うか』と言い給えば、7病める者こたう『主よ、水の動くとき、我を池に入るる者なし、我が往くほどに他の人、さきだちて下るなり』。8イエス言い給う『起きよ、床を取りあげて歩め』。9この人ただちに癒え、床を取りあげて歩めり。

キリストが、

「起きよ、床を取りあげて歩め」

と仰った。大変なひとです。キリストの中にはもの凄い神の権威がある。

●自己離脱

中世の神秘家にエックハルト(Eckhart)という人がいます。この人が、ドイツ語でいうと、

「アップゲシーデンハイト」(Abgeschiedenheit)「離脱」

と言った。自分から別れて脱することです。自分から別れて抜け出ている。実はキリスト自身が――今日の題に「キリストの実存」と書きましが――エックハルト以上の自己離脱のひとです。己から脱して神さまの中に入っている。神さまの中に躍り込んでいるわけです。自分から離脱している。正にイエスは、

「我を見し者は父を見しなり」

と言われたでしょ。ということは、キリストは自分が無いんです。だから、私は

「無者」

と言う。我が無い。大体、「自覚」という言葉は自分を覚えるという字だから、自分が主体となってものをやっていることが大部分なんです。

「人格的主体である」

という、そのいわゆる人格なんていうものも抜けてしまっているわけです。こういう次元は頭の世界では分からない。本当の聖霊の世界に入らないとね。

「我もはや生くるにあらず、キリストわがうちに在りて生きたもうなり」

とパウロが言った。あれが正にこの「離脱」です。

「自分は生きていません。キリストさまが生きていらっしゃいます」

と、彼は自分というものがない。だから、私は「信仰」という言葉が嫌いだ。躓きになるから。自分で信じ仰いでいたってダメなんだ。キリスト教界では昔から散々

「信仰、信仰」

と言われて、信仰がサムシングになっている。私は、

「私は信仰も何もありません」

と、馬鹿みたいな顔している。ところが、その大馬鹿三太郎はキリストの中に入っている。自己離脱してキリストの中へ自分を入れてしまっているわけです。これがその「アップゲシーデンハイト」(離脱)ということです。エックハルトがそういう境地の神秘者だった。我々は、よく「主体、主体」というけれども、「主体」からも抜けてしまっている。これは頭でそういうことを判断したって分からないですよ。無者、自分が無いということです。

●キリストの実存

「我と父とは一つなり」

「私は、父の中に一つになっていて、いませんよ」

というのがキリストの実存です。それだから、

「我を見し者は父を見しなり」

と言えたんだ。これが本当の真の現実です。本当の「真(まこと)」というのはそのことなんだ。こっちの「信」ではないんだ。大方のクリスチャンはそこのところを知らない。

「自分の信仰、信仰」

と言っている。

「まだ信仰が薄くて……」

なんて、キリストの言葉にまた躓いている。キリストは父の中に入ってしまっていて、

「我と父とは一つなり。我を見し者は神を見しなり」

と言われた。極端にいうと、

「私は神さまだよ」

と、キリストはそういうわけなんです。もの凄い力が来ているから、何でもできてしまった。

死人まで甦えらせてしまった。大変な現実です。とにかく、そういう角度の、そういう質の在り方にならないとね。だから、たくさんのクリスチャンがいるけれども、本もののキリスト者は少ない。

「私はキリスト者、キリストのものである」

ということは、

「私はキリストと同じだぞ」

ということ。襤褸衣（ぼろぎぬ）の中に金剛石があるわけです。その人の在り方がどうだこうだと、相対的に判断しているうちはダメです。

「何とでも言え、しかし、私は本ものだぞ」

と言える人が本当にキリストが内在しているひとです。相対的人間は、その人がどんなに欠陥があろうと、その奥に――どうせ、人間はみな五十歩百歩で欠陥があるんだ、人の欠点なんか見たってしょうがない――何がその人に光っているかと、これを見ないとね。本当の自己離脱をすると、本ものが、神がキリストにおいて光っていた。我々においては、キリストが光っている。パウロなんていう使徒はそうなってしまった。キリストに反抗していたやつが、一番ひっくり返されて、無き者にされて、

「キリストがわがうちに生きたもうなり」

というようになってしまった。

「自分は生きてない。キリストが生きているんだ」

と。これはパウロは本ものだ。ペテロはそこへいくと、パウロにはかなわない。

キリストの実存というのは、

「我を見し者は父を見しなり」

ということ。

「私ではない。自分は何もできない」

と、キリストは言ってらっしゃる。ヨハネ伝7章に書いてある。

「我れ何ごとも為し能わず。私は無力だ。自分の力はみな神の力なんだ。神の知恵、神の生命、神の愛なんだ」

と、こういうわけです。だから、愛があるとかないとかを問題にすることよりか、

「本当にキリストが生きているか」

ということです。そうしたら、知恵も愛も力も生命も、みなそこから発現してくる。

●キリストの中に身入（しんにゅう）

キリストはそういうように神の力がきているから、

「お前は治りたいと願うか。池なんかへ行く必要はない。起きよ、床（とこ）を取り上げて歩め」

と言って、相手ができないのに、もうできる現実をそこに言っているわけです。
だから、讃美歌でも、
「……したまわん」
というのは私は嫌いです。
「……したもう」
と、全部、現在の現実として歌わなければダメなんです。「…したまわん」なんていう讃美歌の歌詞では間が抜けてしまって力が来やしない。歌っていて力が来るためには、「…したまわん」ではダメです、
「……したもう。そのとおりです」
でなければ。
「起きよ、床を取りて歩め」
というのは、その治っている現実を直ちに現実にそこでキリストは宣言するわけです。それだけのキリストの力を、力のキリストを内在してなければ、クリスチャンなんて本当は言えないわけだ。たいてい、みな観念クリスチャンなんだ。
「キリストを信じています」
なんて何を言っているかと。
「キリストが神の子で、力のある人であるという事柄を信じて何になるか。現実にキリストの力をいだきなさい」
ということです。もう、簡単ですよ。だから、「信仰」なんていう言葉は要らない。
「私は信仰なんかありません。私には現実です」
と言った方がいい。キルケゴールが言ったとおり、本もののクリスチャンは百人に十人もいない。神さまがアブラハムに聞いているところがあったね、
「この町に義しき人が十人いたら、この町を救ってやるぞ」
と。十人でなく、最後は一人だ。エレミヤがそうです。
「エルサレムにたった一人でも本ものがいれば、このエルサレムは助かる」
という。
「汝等エルサレムの邑をめぐりて視かつ察りその街を尋ねよ、汝等もし一人の公義を行い真理を求る者に逢わば、われ之（エルサレム）を赦すべし。」（エレミヤ5・1）
一人でもそれがいたら、というわけです。
私は「信仰」と言いたくない。「直結」です。
「キリスト直結で行け、キリストに直ぐ結びついていろ」
ということです。キリストに直結していなければダメです。「信ずる」という言葉よりも「信入」です。しかし、この信も要らない。「身入」です。身で、全存在でキリストの中に入っ

ている。こんな言葉はないけれども、身入してなければダメです。全存在がキリストの中に入っていれば、これはもの凄いことになる。そういう本ものにならなくては。「信仰」なんてものはやめだ。「身入」だ。身体が入ってしまう。存在がその中に入ってしまう。

「自分はいません、わが姿はない。キリストを見てくれ、あれが私の姿だ」

と、極端にいうと、そういうことなんです。また、質的にそうでなくてはダメです。

「それは大変なことです」

なんて、ちょっとも大変なことではない。一番簡単なことだ。

「本当に私が見えるか」

「一体何ですか、本当に私が見えるかとはどういうことですか」

「このボロの中にキリストの光が見えているか。真珠のような、ダイヤモンドのようなキリストが見えるか。私の中にはキリストというダイヤモンドがあるんだ。太陽の光よりも凄い光があるんだ」

というわけです。それが本当の聖霊の世界なんです。

●愛せざるを得ない

そうすると、

「汝、愛せよ」

ということは、愛するとか愛せないとかを考える必要はない。

「愛せざるを得ない、人を助けざるを得ない、義のためには戦わざるを得ない」

ということになる。そういう、みなざるを得ない世界です。ドイツ語で止むにやまれないということを「フォン　ノート」(Von Not) という。

「止むにやまれずして為すことが本ものだ」

と西郷南洲も言っている。ヒルティもそういっている。「ニヒツ　アンデレス　ケンネン」(他のようには出来ない)という。止むにやまれずして為すようなやり方でなければ本ものでない。本当にそうです。選択しているうちはダメです。

「こうしようか、ああしようか」

なんて選択して選んでいるうちはダメなんです。選択する必要はない。

「我はかくせざるを得ず」

と、マルティン・ルッターがヴォルムスで言ったのがそうなんです。

この「ざるを得ない」というのが一番本当の在り方です。「ざるを得ない」というのは天的必然なんです。自(おの)ずから然りというのを自然という。大自然の法則は自ずから然りの世界です。それを自然という。仏教に「自然(じねん)」という言葉があるけれども。

太陽が出てくれば、闇は全部、光の世界に変わってしまう。光らざるを得ない。闇を光に変えてしまう。太陽の光は暗黒を光の世界に変える。

「なぜ、私は力が来てしょうがないのでしょう」
ということになるわけです。それは本ものになっている証拠なんです。御霊が来て宿っている証拠なんです。
「三位一体」なんていう教理を信じたって何にもならない。神といえばキリストが、キリストといえば聖霊が、この神・キリスト・聖霊は自由自在に私たちの中で能(はたら)きたもう。それが使徒パウロの実存なんです。キリストの実存がまた神一切で、
「自分は何もできない」
というひとが何でもやった。
「無即無限無量」
というわけだ。老子が、あるところでそれと似たようなことを言っている。老子というのも凄いやつだ。道無き道を行く。自(おの)ずから道を開拓していく。

●体験し体現しなかったらつまらん

息子の棺桶のそばでお母さんが泣いていたら、キリストが
「泣くな。あなたの子供は生きている。出でよ！」
と言ったら、棺桶の中からその息子が出てきた。大変なひとだね、キリストというのは。あれはみな本当ですよ。そういうキリストの力を、二千年前も今も同じことですから、私たちが体験し体現しなかったらつまらんです。
だから、楽しくてしょうがない。楽でしょうがない。そういう烈々たる力をもっているクリスチャンが一体どれほどいるかというんだ。あなた方一人一人は、
「千万人といえども我行かん」
と孔子が言ったけれども、そういうもの凄い力はこのキリストを生きると、どなたでもお持ちになる。自分の力のあるなしなんていうことは問題でない。それは自己から本当に抜けている現実なんです。自己離脱をしていると、キリストがもの凄く働きたもう。キリストの中に自分を投げ込んでいけばいい。よく「棄身」という。あの棄身というのはキリストの中に自分を棄てればいい。棄身の態勢です。
「私は棄身でやるぞ」
ということは、本当はそういうことなんです。どなたでも同じことです。こちらの持ち前の相対的なものは問題でない。知恵でも力でも自在に現れる。だから、本を読んでいても、その作者以上の世界をそこからつかみ出してしまう。ゲーテを読んでいても、
「ゲーテはまだそんなところか」
というくらいになる。ゲーテという人は宇宙的な、大自然と融合しているような魂だから、凄いけれども。
この集会の方は人数が少ないけれども、人数なんか問題でない。たった一人残ったって

いいよ、私はその一人に話すから。みなあなた方一人びとりは貴重なお一人です。私は幾人に語っているのではない。あなた方に一対一で私は語っているんだ。キリスト直結です。「信仰」なんて言う必要はない。「信仰」なんて言うから観念的になってしまう。

●私を離れるな

ヨハネ伝にもどります。

8イエス言い給う『起きよ、床を取りあげて歩め』9この人ただちに癒え、床を取りあげて歩めり。

その日は安息日に当りたれば、10ユダヤ人、医されたる人にいう『安息日なり、床を取りあぐるは宜しからず』

すぐそういうことを言う。律法に、いわゆる宗教的な戒律にこだわっているようなのはひとつも本当の世界ではない。仏教の世界でも、キリスト教の世界でもたくさんあるよ、そんなものは本当の宗教ではない。安息日でもキリストは乗り越えてしまって、普通の日であろうと安息日であろうと、そんなことは問題ではないというわけだ。毎日が安息日で毎日が働く日である。

11答う『われを医ししその人「床を取りあげて歩め」と云えり』12かれら問う『「取りあげて歩め」と言いし人は誰なるか』13されど医されし者は、その誰なるかを知らざりき、そこに群衆いたればイエス退き給いしに因る。14この後イエス宮にて彼に遇いて言いたもう『視よ、なんじ癒えたり。再び罪を犯すな、恐らくは更に大なる悪しきこと汝に起こらん』

「罪を犯すな」

という言葉は、戒律的に戒めのようにとったらダメです。「罪を犯すな」という言葉は、

「私を離れるな。私から離れたらダメだぞ」

ということ。

「罪を犯すなとは大変だな、これは罪を犯さないようにしなければならない」

なんて考えたらダメです。キリストを離れることが罪を犯すことなんだ。罪を犯すもともとは、キリストを離れるから罪を犯すのだから。「罪を犯すな」ということは、

「私を離れるな。私に直結していろ」

ということです。こういうキリストの言葉にみな躓くんだね、

「また罪を犯したらいけない」

なんて。キリストの言葉のもうひとつ奥を捕まえないとダメだ。キリストは天界で、私みたいな伝道者を喜んでいらっしゃるでしょう。

「お前の言うことは本当だ。私の言葉よりも凄い内容だ」

と、キリストはそう言ってくださるよ。私は正直突き抜けているから、そういうことをは

つきり言える。自分を突き抜けていなければダメです。自分なんていう、クリスチャンなんていう自覚はひとつも要らない。

「私は何ものでもない。問題はただキリストだけです」

と、キリストを相手にしている。本当にキリストを相手にするためには、自分が本当に平伏していなければダメです、本当に自分がキリストの中にぶっつぶれていないと。ぶっつぶれている人が本当にキリストを相手にできる。

●キリストの直弟子の次元

絶対矛盾の自己同一ということです。西田さんの哲学みたいだ。西田さんの哲学であろうと何であろうと、この聖霊の力でもってみな読めますよ、それ以上のことも。

「西田さんもその程度か」

というくらいに。

私の大きな詩が出来たら、みなびっくりするよ、烈々たる文字だから。私の詩を見ていたら、火を吹いているような詩だ。世界中に今まで無いようなものを書いてやる。もう大分書いた。出来上がるまで誰にも見せません。出来上がって私が向こう側に行ってから、

「ああそうか、こんなものが書いてあったか」

なんていうわけだ。私の中に燃えているところの霊的な火というものは、何ものもこれを消すことができない。

本当にキリストの直弟子のパウロの次元までこなければダメです。パウロだけは本ものです。私はパウロだけだね、キリストの弟子では。これは本ものだから。大変な人です。ユダヤ教のチャンピオンだったのが今度はキリストの大使徒になった。大の字がつくのはパウロだけだ。パウロの他は問題にならない。ローマ書は凄い。あと、非常に神秘的な素晴らしいものはヨハネ黙示録です。パウロの書翰、ローマ書と黙示録を読めば、これは新約の焦点だ。もちろん福音書はキリスト自身だから、これは大変です。

キリストには驚嘆驚倒しながら行くんです。そうすると、キリストの力が働いてしょうがない。疲れを知らない人になる。

14 **この後イエス宮にて彼に遇いて言いたもう『視よ、なんじ癒えたり。**

「身心共に健やかになった」と。

再び罪を犯すな、

これは「私を離れるな」ということ。「罪を犯すな」と、そんなことを心配する必要はない。キリストを離れなければ、もう問題はないから。

恐らくは更に大なる悪しきこと汝に起こらん』

「離れたら、大なる悪しきこと汝に起こらん」

と。恐ろしいよ、こんなことを言われたら。

「さぁ、困った」
なんて、みなそう思うだろう。困らない。
「私はあなたにしがみつきますよ」
と言ってやればいい。

15 **この人ゆきてユダヤ人に、おのれを医したる者のイエスなるを告ぐ。16 こ**
こにユダヤ人かかる事を安息日になすとて、イエスを責めたれば、

いわゆる宗教の世界はすぐそういうことを言う、
「安息日にはこういう事をしては悪いのなんの」
と。安息日も平日もない。為すべきことは、善きことはそんな区別なしにキリストはやるから。安息日にしたのしないのどうのこうのと、そんな差別をしている。
「プロテスタントだ、カトリックだ」
なんて言っているうちはダメです。プロテスタントであろうと、カトリックであろうと、何であろうと、いいよ。
「キリスト直結であるか」
だけが問題なんだ。その人の生まれ方からいって、カトリックになったって、プロテスタントになったっていい。カトリックをサムシングにしたり、プロテスタントをサムシングにしたら、どっちも捕らわれているから、同じくダメなんだ。カトリックとプロテスタントを比較研究する必要はひとつもいらない。カトリックのどこが良くて、プロテスタントのどこが良くて、どこが悪いのと、一般にそういう研究をするけれども。

●創造の世界

研究というのは普通はダメです。研究者を私はただケチをつけるわけではない。研究もいいでしょう。けれども、研究の世界は二次的な、第二義以下の世界です。本当の世界は直結の世界、創造の世界です。その人が創作していく世界なんです。本当の詩人にならなければダメです。本当の建築家にならなければ、本当の作曲家にならなければ。ベートーベンが凄いのは、自然の中で自然の音ならざる音を聞いて、それで作曲できるわけだ。彼は耳が悪いから、耳で聞いているわけではない。ちゃんと目で聞いている。目で見ているのではなく、目で聞いている。
果物を見るのは目で食べている。口で食べるのではなく、目で食べている。
「おいしそうだなぁ」
ではなくて、目で見て
「あぁ、おいしいなぁ」
と言う。もう何も食べる必要がない。そういう境地まで入らなければダメなんだ。
「まだ食べませんから」

ではない。

「あそこに実っているリンゴをもう私は食べました」

と、本当に見ていれば、食べた世界に入ってしまう。

人間は大体90何％は水だから、水だけ飲んでいればいい。栄養やカロリーがどうだなんて、そんな研究はひとつも要らない。ご苦労さんな話だ。私は随分乱暴なことを言うね。けれども、それは本当だよ。私は好き嫌いなしに何でもいただくから、自然にバランスがとれている。

漱石なんていうのも、英文学の素晴らしい達者な人で、すっかりこなしてしまっているから、漱石の文学そのものが凄いことになった。真似しているのではない。溶けてしまっている。英文学が溶けてしまっている。本ものというのは融合した世界に入らなければダメなんだ。海を見て――海で泳いでみなければ海の水は塩辛いのが分からないけれども――塩辛い水がちゃんと目で味わっているようなことにならなければね。耳で見たり、目で味わったり、自由自在です。

●自己を突き抜けて

17**イエス答え給う『わが父は今にいたるまで働き給う、**

神さまはしょっちゅう働いているんだと。神さまは万物を導き、万物を展開している。創造的な力で働きたもう。

我もまた働くなり』

「私も神さまと一緒に働いているんだ、何が悪いか」

と。病める者があれば、安息日であろうと何であろうと、すぐ治してやる。

18**此（これ）に出りてユダヤ人いよいよイエスを殺さんと思う。**

律法に反するやつだから、こいつをやっつけてしまおうと思ったという。

宗教の世界で殺すの殺さないのとやっている。カトリックとプロテスタントとの宗教戦争があるでしょ。あんなことはとんでもないことだ。大間違いだ。どっちも間違いだ。相手が仏教であろうが、イスラム教であろうが、それが本ものであれば、ちゃんと尊敬しなければダメなんだ。

「キリスト教に変われ」

とか、そんなことを言う必要はひとつもない。在り方はそれぞれで結構です。ただ

「本ものでいてください」

ということです。何も統一することはない。よくこの頃、「統一」ということを言う。統一する必要はない。神さまがちゃんと統一していらっしゃるから、人間的な統一はひとつも要らない。相対的な判断は全部ダメです。

「神さまと一緒に自分は働いているんだ。安息日もヘッタクレもないんだ」

と。

それは安息日を破るのみならず、神を我が父といいて己を神と等しき者にな し給いし故なり。

「これは律法に反するからやっつけてしまえ。安息日を破るやつだ。神をわが父と言って己を神と等しくするとんでもないやつだから」

と、こういう判断をしている。ユダヤ教の凝り固まったやつが言いそうな言葉だ。キリストはユダヤ教なんかをもう突き抜けてしまっている。ユダヤ教を突き抜けてしまった。旧約をアウフヘーベンしてしまった。だから、キリストは十字架に架からざるを得ない。そんなわけの分からない奴らばかりだから。本ものはその時代には大体受けられない。後からやっと、

「ああ、あれは本ものだった」

と分かる。要するに、

「自己を突き抜けて、キリスト直結で行け」

ということです。

●キリスト直結者

棄身というのは、キリストの中に棄身すればいい。キリストの中に棄身すれば力が来る。そうしたら、あなた方はその力でもって病める人に手を按いてごらん。力が働くから。それを実際にやらなければダメです。

「ご心配いりません」

と言って、手を按いてやる。

「はいっ、治りました」

と、そう言ってやる。「はいっ、治りました」と言える時には、本当に自分の中からグーッとキリストの力が流れたことを感ずる。それだけ充満していなければダメですよ。

「治りました」とは、その瞬間に本質的に治ったので、現象として治るのは後かもしれない。そんなことはどっちだって構わない。本質と現象は違うから、ズレが来る。それはその時その時のいろいろな情況による。本質的には治っている。それがいつ現象するかは、神さまはちゃんとご存じだから、キリストに全托していればいい。質的に相手に本当に力を与えていれば、

「もう治った」

という世界なんです。それがいつ現象するかは、明日現象するか、一週間後に現象するか、どっちだっていい。

「なるほど、やはり治っていたなぁ」

なんて、後からわかる。それくらいの権威を、皆さんはもってくださいよ。自分の権威ではないんだ、キリストの権威だから。賜りたる権威だから。

「武蔵野幕屋の小池という変わり者の会員たちは、何か知らないけれども、みな不思議な力をもっているな」

なんて。そういうことなんだ。不思議な力を大いに現してください。それは、男であろうと女であろうと、老いたる者も若き者も、区別はありません。

楽しいですか、聞いていて。楽しくなければダメだよ、

「そうですか」

なんて、怪訝な顔してたら。

「楽しくてしょうがない。なるほど、もうそうなりました。質的には、そういうものを受けとりました」

と。信じたのではないよ、受けとるんだ。私は「信ずる」という言葉は嫌いだ。受けとらなくては。体受する、身体で受けとることです。

相手があなた方であろうと、相手が百人いようが、私は同じことをしゃべる。数は一向関係ない。あなた方は私の話を直かに聞いているから、私の書いた本を読むと、本の響きがわかる。文字の意味ではない。響きがこなければダメです。意味の世界ではない。ことに福音書のキリストの言葉や行為を読んでいると、楽しくてしょうがない。力が来てしょうがない。「ありがとうございます」と、平伏して読む。

「私はクリスチャンです」

なんては言わない。

「私はキリスト直結です。いわゆるクリスチャンなんて、そんなものではない。キリスト直結者です」

と言わなくては。そうすると、

「キリスト直結なら、立派か」

なんて。立派でも何でもない。私は、躓いたり転んだりしている男ですよ。しかし、躓いても転んでも、必ず前進せざるを得ないような力が来ているから仕方がない。このキリストの、聖霊の生命力を誰が奪うことができるかと言うんだ。

●各人が歩いて体験し体現する真理

「小池先生は90歳だけれども、90歳には見えない」

と言われる。何歳だっていいよ。私は95歳であろうが、100歳であろうが、同じことだから。もう歳は数えることはやめた。終りなき生命を生命していくだけのはなし。主さまを証しするだけのはなしです。それが分からない人は、分からなくたって仕方がない。自分で体験してみたら、

「やはり、小池先生は本ものだった」

と、自分で体験するまでは分からない。私は、あなた方お一人お一人がそういう本もので

ありつつあることを信じています。頭で聞いていないから、全身で聞いていらっしゃるから。頭で聞いている人はダメです。

集会は楽しいですか。前期はあと二回でお終いで、あとは夏休みです。夏休みでボケたらダメですよ。夏休みを過ぎてきたら、

「いや、皆さん一人一人は凄いことになっているな」

と、私を驚かしてください。休みというのは眠っていることではない。夏休みに本ものを、お一人お一人がそれぞれの路において獲得して、光り輝いて秋にはお目にかかると、こういうわけです。その光り輝くのは、必ず人助けをすることになる。

「何だかしらないけれども、人助けをしてしまった。病人を癒しました。困っている人には、本当に魂を救ってあげました」

と、いろいろな体験を、今度は夏休みが済んでから、お話していただきたいですね。体験してきてくださいよ。

「お土産話は一つもありません」

では困るよ。大丈夫だよ。

電車に乗っていて、隣の人に話そうと思ったら、チョコレートか何かをまず上げて、

「おあがりなさい」

と、それから話にかかる。チョコレートをやってからでないとダメだよ、いきなり話したって。話しているうちに、

「ああ、そういう世界があるんですか、ひとつ今度は聖書を読んでみましょう」

なんていうことになる。

聖書は教えではない。キリスト教なんて言うから大間違いだ。教なんていうからダメなんだ。これは道なんだ。キリスト道です。各人が歩いて体験し体現するところの真理であって、頭で分かる真理ではありません。

●聖書は楽しくてしょうがない

これがヨハネ伝5章1～18節の、キリスト直結ということです。安息日を破って、キリストは人助けをしたんだ。いわゆる宗教を破ってしまった。これが本ものの宗教だと。だから、キリストは皆に理解されないで、誤解され迫害されて、とうとう十字架というわけだ。これはもうイザヤ書53章に預言してある。イザヤ書53章をキリストは自分でちゃんと、

「これは私への預言だ」

と思って読まれたにちがいない。イザヤ書53章は地獄のような世界、十字架を負う世界です。イザヤ書35章は栄光の世界、復活のキリストの顕現する世界です。35章は天国的な現実がうたわれているところです。とにかく、

「聖書は楽しくてしょうがない」

と言って読んでくださいよ。意味の世界ではない。響きの世界だから。そして、特に感じた所は必ずサイドラインを引いておきなさい、

「これは私の魂に響きました」

と言って。

私はあなた方お一人お一人が大事な存在だと思っている。大きな教会で牧師さんが聖書の研究をしていろいろな説明して、いわゆるお説教している。そんなものを聞いて何になるかというんだ。あれはみな研究してものを言っている。聖書と共に創作していくような世界でないとね。第一級の人はみな創作していく人です。二級以下が研究していく人です。

それが建築であろうが、音楽であろうが、詩の世界であろうが、何であろうが、第一級は全部、創作的な人間です。だから、創作されたところの作品は本当に人を動かす。『レ・ミゼラブル』でも何でも。ドストエフスキーでも、トルストイでも、ゲーテでも。ブラウニングでも、シェークスピアでも、ダンテでも。みなこれは創作家だから。

いわゆる説明している世界は大したことはない。だから、註解書というのはダメなんだ。註解書を一生懸命で研究している人がいるけれども、ご苦労さんなはなしだ。悪いとは言わないけれども。

どうぞ、皆さんも、生き生きとした生き方をなさってください。夏は夏で極めて有効にお過ごしください。キリストの生命力は限りないですから。どこか具合が悪くたって、自然に治ってしまうよ。

「知らない間に治っていました」

なんてね。